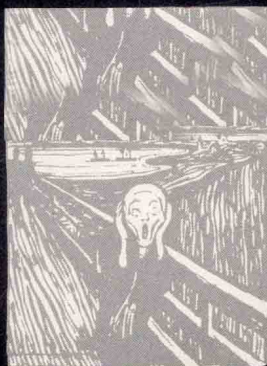


五木寛之作品集

24

五木寛之作品集

24



文藝春秋



五木寛之作品集 24

魔女伝説

1974年9月20日第1刷

著 者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製 函／株式会社加藤製函所

製 本／大口製本印刷株式会社

© 1974 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

五木寛之作品集第二十四巻／目次

人物論

林達夫

9

ヘンリー・ミラー

13

唐十郎

16

ゴーゴリ

19

石川啄木

22

チエホフ

24

川崎彰彦

28

オーウェル

31

夢野久作

34

ゴーリキイ

37

高橋和巳

39

谷譲次

42

暁島敏

46

片岡啓治

50

書物について

ローブシン著

蒼ざめた馬

55

いいだ・もも著

リズムミックな世界線を

57

池田皓篇	60
日本庶民生活史料集成・5・漂流	
小田実著	
難死の思想	65
植草甚一著	
モダン・ジャズの発展	66
井上光晴著	
黒い森林	68
アラン・シリトー著	
屑屋の娘	75
大西巨人著	
戦争と性と革命	76
現代ソヴェト文学18人集	79
平岡正明著	
ジャズ宣言	82
安宇植著	
金史良	84

あとがき集	89
さらばモスクワ愚連隊	
青年は荒野をめざす	91
幻の女	91
風に吹かれて	92
男だけの世界	93
ソフィアの秋	94
内灘夫人	95
白夜の季節の思想と行動	96
ゴキブリの歌	97
デラシネの旗	98
わが心のスペイン	99
地図のない旅	100

変奏曲	102
にっぽん退屈党	102
夜のドンキホーテ	103
深夜の自画像	104
作家以前の文章	109
みくだり半的恋文	115
サドをめぐって	118
白昼の対決	121
トルストイとはどういうものか	124
泰阜ダム撤去同盟の歌	141
農業労働組合はどこへ行く	149
京浜少年労働者の夢と現実	152
貿易自由化と農業問題	157

コンチ・ガールのアクセサリ	157
スウェーデンのピンクの世代	160
ディートリッヒの着ていた服	164
折り返しつきのズボンの唄	167
舞台裏からの手紙	170
愛することと憎むこと	173
対談	179
羽仁五郎 —— 絶望的青春論	197
稲垣足穂 —— 反自然の思想	215
わが心のスベイン	219
魔女伝説	291
緑魔子	291

解説 寺山修司	367
ワーク・リスト	319
略年譜	313
笠井紀美子	308
杉本エマ	303
太地喜和子	298
麻生れい子	294

魔女伝説

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル

カバー・扉カット／エドワルド・ムンク 「叫び」より

人物論

林 達夫

林さんは、などと私が気やすく書くべきではない。それはとんでもない事だろう。私もそれ位は知っている。しかし、私としてはどうしても、林達夫先生、などとかつめらしく書く気分にはなれないのだ。先生、という言葉は、余りにもいい加減に世間で使われすぎている。敬して遠ざける感じもあるし、時には蔑称としてもちいられる場合も少なくない。私は林達夫という思想家に直接お目にかかったこともなく、また教えを受けたという事実もないが、しかし、先生、と書くには余りにも身近に感じすぎており、またその物の考え方に深い影響を受け続けているために、かえって林達夫先生、とは書く気がしないだけなのだ。

林達夫氏、と書く手もあるが、これはどこか第三者的だし、研究の材料みたいな感じもして好きではない。林達夫、と書くところはまるで故人か論敵といった具合で、滑稽である。そこで最も自分の気持ちに正直に、おそろおそろ林さんと呼ばせていたと思う。というのも林さんご自身がお書きになっているように、私たちの生きている現代は、いまだに逆説的時代なのであり、そういう時代において一人の人間とその思想に対する真の敬愛は、決して尊崇の念を面にしたえた形ではあらわし得ないのであるから。

ところで、林さんの書かれたものに私がはじめて接したのは、昭和二十七年の夏だったと思う。その年、私は九州の田舎から上京して、早稲田の露文科にもぐり込んだばかりであった。入学と同時に、いわゆる「血のメーデー事件」に出くわし、続いて息つくひまもなく「早大事件」と呼ばれる警官隊の実力行使に直面することになった。大学は一種の熱っぽい高揚期にあり、同級生の中からも仲間にひそかに別れを告げて、小河内や赤石の山村に工作隊員として潜入する友人たちがあいつぐといた、かなりバセチックな季節だったようだ。当時の私た

ちに大きな力を持っていたのは、映画（若き親衛隊）であり、アラゴンやエリユアールや、ショスタコヴィッチの（森の歌）や、さらにジダーノフ、そしてなによりもスターリンの巨大な姿が頭上にそびえていた。そのスターリンの影は、言語学から歴史、経済から生物学にまでおよんで、私たちを圧倒していた。私がその頃、スターリンの威勢から比較的自由でいられたのは、今にして思えば、ひとえに私の不勉強のせいではなかったろうか。私は常にアルバイトに追われていたため、スターリンを学習するエネルギーと時間を持つことができず、そのことを内心うしろめたく思っていたのである。だが、敗戦時に外地にいて、いささかソ連軍の進駐と軍政を経験している私には、社会主義国家に対する仲間の人道主義的な幻想が、どこか違和感をおぼえたと同じように、スターリン氏に対しても一点、かすかに首をかしげる感じを内心抱いていたようだ。だがそんな醒めた気分が頭をもたげる度に、私は自分のそのようなブチブル意識を自己批判し、あわててそれを他人に気づかれぬよう（ヘシベリア大地の歌）などを口ずさんでごまかしたものだ。た。

そんな時期に私は林さんの『共産主義的人間』を読ん

だのである。それは私にとって、ひどく危険な書物のように思われた。とんでもないことを恐れもせず言う人物だという気がした。それは私が内心ちらと考えたり、感じたりしながら、大急ぎで自分の頭の中から追いはらうことにしているある（本当のこと）を、はつきり口に出して述べている文章なのである。私はそのいまわしい考えに伝染しないため、あわててアラゴンの本やファジーエフの小説をひろげ、思想的防疫につとめた。だがしかし、その『共産主義的人間』の中の、ごく平静な声で語られている事柄の逆らい難い真実味から逃れることは、どうしても不可能なようであった。例えば、第二次大戦中においてソ連軍将兵は旺盛なる士気と共にまた旺盛なる所有欲をも示してブルジョア世界を震撼せしめた、などというくだりにぶつかる、まことに不謹慎なことながら思わず苦笑せずにはいられなくなってくるのである。それは戦争中、きわめて権威主義的であった私の父親が、若いソ連兵にマンドリン銃をつきつけられて、あわてて猿股の中に隠したロンジンの腕時計を引っぱり出すシーンと重なって、私の笑いを誘うのだった。また、ソ連のナショナリズムについての指摘を読むと、まさし

く私が見てとったソ連人の特質がくつきりと浮きあがってくるような気がした。少年時代の私の記憶からすると、ソ連の民衆（兵士）たちは、驚くほど人種的な偏見を持たぬ人々でありながら、一方ではきわめて国籍的偏見を強く示す傾向があった。ある人間に対して彼らが偏見を抱くのは、その個人の肌や髪の色や人種にはなく、その属する国家とソ連との時事的関係如何にかかわることが多いように見うけられたのである。

一般に、文章の形で示される逆らい難い真実の「本当らしき」は、二つの相反する反応を私たちの内に呼び起こすような気がする。ひとつは身の引き緊るような厳粛な感じであり、もうひとつは、思わず微笑をもらすような解放感と共に訪れてくる種類のものなのだ。林さんの『共産主義的人間』が、当時の私にもたらしたのは、その後者に当るものだった。「かなわんなあ」という、関西風のニュアンスをもった呟きが苦笑と共に自分の口からもれて、その瞬間、それまで何かに閉ざされていた自分の精神が不意に自由になったような、そんなリラックスした感動なのである。そして私は最初おそるおそる読んだ林さんの本を、次第にすすんで探し求めて読むよう

になって行ったらしい。ただ他人にはそのことを黙っていた。それはなぜかと言えば、当時の私が、たとえ片方で醒めた視線を持つことを自分に許したとしても、やはりもう片方の目ではもう一つの熱狂、または信仰をみつめていたいとどこかで願っていたせいかも知れない。

ところで、そんな昔話とは関係なく、自分がいかに大きな影響を林さんの書かれたものから受けたかを痛感するようになったのは、実はこの数年のことである。

それはひと言でいえば、つまり「反語的精神」の貴重さであり、逆説の感覚の強さともいうべきものではないかと思う。『共産主義的人間』が私にあたえたのは、いわば具体的な物の見方の姿勢であったが、後に読んだ『歴史の暮方』の中の一節は、文字通り私自身の生き方を決定的に方向づける働きをした。「ドストエフスキに囁まれた」という言い方が流行ったことがあるが、私は文字通り『歴史の暮方』の中の一行の文章によって、その後の自分の生きる姿勢を決められたのである。それはつまりこういう一節だった。

「——現代のような逆説的時代には、真の誠実は絶対に誠実らしきの風貌は取り得ない。現代のモラリストは、

事の勢い上、不可避免的にイモラリストとなる。」

この言葉は、『反語的精神』の次の一行に対応する。

「反語家はその本質上誤解されることを避け得ません。しかし彼はそれを平気で甘受し、否、ひそかにこれを快としてゐるほどに悪魔的でさえあります。」

私にとってこの簡にして明なる文章は、白夜のような混沌たる時代を生きる、あるいは生き方を演じる上での決定的な原点として深く突き刺さったトゲのようなものとなった。そして私はひそかに人々に誤解されるように生きたい、という不遜な望みを抱きながら世間と対してきた。しかし、私は林さんの言葉を信じるが故に、現実的には林さんの書かれたのとは反対の方向へ歩き出すべきだと考えたのである。そうでなければ自分が反語的精神に噛まれたなどと、どうして言えるだろう。私がこの文章のはじめに、「現代は、いまだに、逆説的時代なのである」と書いたのは、そのためである。私は林さんの言葉を次のように聴いたのだ。

「現代のように異端または反語的思考が表面的・風俗的に流行しつつある時代には、真の誠実は絶対に誠実らしさの風貌を取らねばならない。現代のモラリストは、事

の勢い上、不可避免的に一見モラリストらしく見えざるを得ない」と。

私がゲバラよりカストロに親愛の情をおぼえるのも、偽悪家より偽善の道を選ぼうと願っているのも、すべて林さんの反語的精神の端っこを齧らせていただいたせいである。異端らしき、無頼らしき、一見ゲリラ、一見イモラリストが喝采される現代こそ、真の逆説的時代の底の底であり、林さんの暗示された反語的精神がまさしく生きるに値する季節であると思われるのではないのだ。私たちはその中で、一見誠実らしく、他人に見せかけている人間のように誤解されることを、決して恐れるべきではないと思う。それは絶望的なほど困難な生き方のようにも思われるが、しかし、林さんはいみじくも、その思想を「絶望から」出発する精神として語っておられるのである。と同時に、反語家の足もとにぽっかりあいている危険なおとし穴についても、指摘されているのだが、「仏界入り易ク、魔界入り難シ」で、私たちは常に危うかしい生き方のほうに惹かれるものなのだ。こうして林達夫さんは、私たちにとって、いつまでも恐ろしい魅力を持たえた存在であり続けるのである。例えば私がこの短

い文章の中で、まさに勇を鼓しつつ、林さん、と書きつづけてきたのも、ひとりの人間を、生きたまま偶像化するのを徹底して拒否しようとする林さんのその姿勢に深く感動し、深くうたれて、自分もそのように生きたいとひそかに決意すればこそなのだ。

へ一九七一年・『林達夫著作集』3 研究ノートへ

ヘンリー・ミラー

ヘンリー・ミラーについては、余り書いたことがない。一度だけ短い文章を「NOW」という雑誌にのせたことがあるだけだ。ヘンリー・ミラーに限らず、ローレンス・ダレルだとかケッセルだとか、ソ連の若い詩人グループだとか、イタリアの流行作家たちとか、いろんな人と酒を飲んだり喋ったりした記憶を、私はほとんど自分だけの中にとじ込めてしまっている。いずれ何もかも忘れてしまつて、そんなふうに出合つた事が本当にあつた事だったかどうかともわからなくなつてしまふのではあるまいか。それはなぜかという、私は物書きとして彼ら取材するために会いに行つたわけではないからだ。そしてその出会いは気軽な身内の遊び相手の一人として

のものであったし、私はどんな意味でも彼らとの接触を仕事の上にもちこむまいと決心していたからである。

私はその作家たちに著書のサインを頼んだり、一緒に並んで写真を撮ったり、帰国してから手紙を書いたりすることをしなかった。まして後になって彼らの印象記を書いたりするようなことをできるだけ避けようと考えただからこそ、極度にジャーナリズム上の効果に神経質な外国作家たちが、ひどくぎっくばらんに人間としての素顔の一端をのぞかせてくれたのではないかという気がする。

ヘンリー・ミラーのオカンボの家へ顔を出した日、私は彼にピンボンの試合をいどまれ、本気でその老人と対決した。そして、かろうじて一セットだけわずかに勝ち越すことができた。彼はその事がかなり口惜しかったと見え、「君はいい選手だ。われわれは素晴らしいファイトをした」と握手しながら、もう一度あすやろう、とどこか本気の目の色で私に約束させた。

それから毎日のように私は近くのミラマ・ホテルからオカンボを訪れ、思っていたよりもずっと小柄で、立派な顔を持った作家とピンボンをした。疲れると庭のプー

ル（プールといってもそんなに大げさなものではなく、ごく実用的なつつましいプールであるが）で泳いだり、日本の女について喋ったり、いつも遊びにきているグレイ氏と、ホキやその仲間をまじえて麻雀をしたりしてのんびりした午後をすごした。夜になるとかつて彼がホキに意志的な求愛を続けたナイト・クラブや日本料理の店などへも出かけたりしたが、彼はその間たえず周囲の人間たちに信じられないほどの優しい心くばりを見せていたように思う。

私は英語が苦手なので、彼と喋っているより何か一緒に体を動かしている時間の方が多かったが、ドストエフスキイとエドワード・ムンクについて少し話をした事が記憶に残っている。それはとても暗示的な意見だった。

またその頃、ロスアンゼルス映画館にかかっていたへおれたちに明日はないについて、彼は充分にその面白さを認めながらも、こんなふうに言っていた。

「あれは面白い映画だが、でも君、もしあんなふうに人を殺す場面を作品として公開することが許されるのなら、どうして人が性交する場面を公開していけないのかね。戦争映画や暴力を描いた映画より、平和的な性交のほう